

ローマ人への手紙第八〇回質問

7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

7:25 私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。こうして、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。

ロマ七章二四〜二五節／新改訳2017)

(問一) 7章14―25節に取り上げている人は、生まれ変わった人の正常な姿ではありません。似たような葛藤の悩みを説明していると思われる次の五個所の聖句を参照して、ロマ7章14―25節の葛藤とは全く反対のこと記しているものであることを説明してください。

- ①ガラテヤ5章17〜18節、②一コリント9章26〜27節、
- ③エペソ6章12節、④ロマ8章23節、
- ⑤二コリント5章2〜4節)

(問二) 生まれ変わったキリスト者の正常な姿は、もっと力強く、勇ましい者であることを次の六個所の聖句から説明してください。

- ①ロマ5章1〜2節、②ロマ5章12〜21節、
- ③ロマ6章6〜7節、11節、④ロマ6章12〜13節、
- ⑤ロマ6章14節、⑥ロマ8章全体での勝利の叫び)

(問三) 結論として、パウロは、ロマ7章14―25節で描かれている人を通して何を私たちに伝えているのですか。





希望のある悩み

(ロマ七章二四―二五節)

七章一四節から二五節に取り上げられている人が、すでに生まれ変わった人なのか、それともまだ生まれ変わっていない人なのかということについては、この個所を学び始めた最初に言及しました。今まで本文を学んできて、おおよその結論⁽¹⁾が出されました。それは、生まれ変わった人であるべきです。

そうであるとする、一つの疑問が湧いてきます。生まれ変わった人の正常な姿なのであるかということ。わたしたちは、聖書の一節やある個所だけから独特の教えを作り出してはなりません。聖書の重要な教理は、必ず全聖書が教

えています。それほどはっきり教えてもいないことや、一つの節、一つの個所に読み込みをして、新しい教えを主張するところから、異端が起こってきました。ですから、わたしたちもこの個所において、これが生まれ変わった人、つまり生まれ変わってからのパウロ自身について述べているということがわかったら、これが正常な姿なのか、そうでないのかということを、この個所だけから決定することは危険であると言わなければなりません。そこで、このような二つのもの対立、葛藤の悩み、苦しみについてしるしていると思われる他の個所を参照してみる必要があります。

ところで、まず最初に挙げたい個所は、ガラテヤの諸教会への手紙五章一七節です。

「というのは、肉の欲望は御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからである。この二つのものは、互いに対立していて、そのために、あなたがたは自分の願うことをすることができないのである。」

ここにも、確かに二つのものの対立が描かれております。しかし、よく見ると、ここではわたしたちクリスチャンのうちにあるものの対立ではなく、「御霊」と「肉」の対立であって、しかも、このすぐ前のところでは、御霊に従って歩む者への勝利が約束されています。そういう文脈の中でしるされているのです。「御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲望を達成してしまうことはない。」ですから、ローマ教会への手紙七章でしるされることは全く反対のことをしるしていると言ってもよいでしょう。ガラテヤの

諸教会への手紙五章は、むしろ積極的に御霊の力による勝利について示しているわけです。そのことについては、ローマ教会への手紙八章と対比することができるとおもいます。次に、コリント教会への第一の手紙九章二六―二七節を見てください。

「ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」

確かにここでも、ひとりの人間の中にある葛藤が描かれています。しかし、この葛藤は、ローマ教会への手紙七章で描かれていた葛藤とは違っています。ローマ教会への手紙では、「わたしのからだのいろいろな部分には、別の原理があつて、それがわたしの心の原理に対して戦いをいどみ、わたしをからだのいろいろな部分にある罪の原理のとりこにしているのを見いだすのである。」つまり、ローマ教会への手紙でしるしている人物は、「自分のからだを打ちたたいて従わせ」るところとすらできなくなつてしまつているみじめな人間なのです。から、コリント教会への第一の手紙九章は、ここで取り上げた個所とは全く違ったことを述べているわけです。

それでは、また別の個所を見てみましょう。それは、エペソ教会への手紙六章一二節です。

「わたしたちの戦いは、血肉の人間に対するものではなく、もろもろの支配や權威や、暗やみの世界の支配者たち、ま

た天にいるもろもろの悪霊に対するものである。」

ここにも確かに「戦い」ということばが出てきます。しかし、ここでは「血肉の人間に対するものではなく、……悪霊に対するものである」と言われていて、ローマ教会への手紙七章にしるされている人間の中における葛藤とは違います。

それでは、ローマ教会への手紙八章二三節の場合はどうでしょうか。

「そればかりではなく、御霊の初穂をいただいているわたしたち自身もまた、自分自身の中でうめきながら、子としていただくこと、すなわち、わたしたちのからだか贖われることを待ち望んでいる。」

ここでも確かに、生まれ変わった人の心の中にある「うめき」について述べています。しかし、これは必ずしもローマ教会への手紙七章で述べているうちに宿っている罪との戦いにおけるうめきではありません。むしろ、救いの完成への待望の色彩が強く、救われたクリスチャンでも、この罪の世に生きているかぎり、苦しみ、悲しみ、悩みを味わわなければならないということ述べているわけです。

それでは、コリント教会への第二の手紙五章二―四節はどうでしょうか。

「私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。……確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからではなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによつて、

死ぬべきものがいのちのまれてしまうためです。」

ここで語られていることは、むしろローマ教会への手紙八章二三節で語られていることと同じことで、七章で語られていることと、必ずしも同じではありません。

このように見てきてわかったことは、ローマ教会への手紙七章一四―二五節で取り扱っていることと全く同じことを取り扱っている個所は、新約聖書の中にはかに見当たらないのです。それでは、どうしたらよいでしょうか。

確かにこの個所に描かれている人物が、生まれ変わったクリスチャンの正常の姿と言えるかという疑問は、根強く、わたしたちに問いかけてきます。というのは、この同じ手紙において、彼が描いている生まれ変わったクリスチャンの姿は、もっと力強く、勇ましいものだからです。

「それだから、信仰によって義とされたわたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストを通して、神との平和を持っている。また、キリストを通して、今立っているこの恵みに、⁽²⁾信仰によって入れられ、神の栄光の希望を持って喜んで⁽³⁾いる。」

さらに、同じ章の一―二節では、「恵みもますます満ちあふれた」と勝利と救いの確かさを語っています。

六章に來ても調子は同じです。「それでは、わたしたちは何と言おうか。恵みが増し加わるために、罪の中にとどまるべきか。断じてそうではない。罪に対して死んだわたしたちは、⁽³⁾どうして、なおその中に生きていられるだろうか。」さらに、それに続いて、こう語っています。「わたしたちは、

このことを知っている。わたしたちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、わたしたちの罪のからだが無
力になって、もはや罪の奴隷となることがないためである。
というのは、死んでしまった者は、罪から解放されているか
らである。……このように、あなたがた自身も、罪に対して
は死んだ者、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きて
いる者と思い定めていかなければならない。⁽⁴⁾「それだけでは
ありません。それに続く個所では、次のようにしるされてい
るのです。

「だから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にまか
せて、その情欲に従わせてはならず、あなたがたのからだ
のどの部分でも、不義の道具として罪にささげてはいけな
い。むしろ、死人の中から生かされた者として、あなたが
たのからだとそのどの部分も、義の道具として神にささげ
なさい。⁽⁵⁾」

このような勧めを見ると、七章一四―二五節に描かれている
人物のように打ちひしがれてはいけません。ここでは、「あな
たがたの死ぬべきからだを罪の支配にまかせて……はいけな
い」と勧められているのに、七章二三節では、「わたしをか
らだのいろいろな部分にある罪の原理のとりこにしているの
を見いだすのである」と言っていて、全く似つかわしくあり
ません。六章一四節では、「罪があなたがたを支配すること
はないからである」と言っているのですから、なおさらです。
この同じ手紙のすぐ近くにしるされているこの両者は、どの
ように調和するのでしょうか。

さらに八章に行っても、そこに見られるものは、勝利の叫びです。敗北やみじめさの告白ではありません。それはついに義認から栄化へと至る勝利の叫びです。

それだけではなく、全聖書の中のほかの個所と比較しても、生まれ変わったクリスチャンの正常な姿として、このようにみじめな姿を描いているところは見当たりません。⁽⁶⁾ それでは、これは、ある人々が考えているような未熟なクリスチャン、つまり、生まれ変わってはいいても、第二の恵みと呼ばれるきよめの経験をしていないクリスチャンの姿なのでしょうか。しかし、第二の恵みと呼ばれるきよめとか、それによって敗北や失敗や罪を絶対に犯すことのないクリスチャンになれるというようなことは、この個所からも、聖書のほかの個所からも引き出してくることはできません。

それでは、これはどういう人を描いているのでしょうか。文脈を見てみますと、律法を問題にしています。パウロは、以前パリサイ派の学徒として律法について学んでいました。しかし、神の律法については、必ずしも正しい見方をしていませんでした。そして、キリストによる恵みの救いについて彼が知り、それを宣べ伝え始めると、これを聞いた人々の中にも、律法についての正しい考え方をしない人が現われて来、「律法は罪なのか」というような考え方をする人が出て来ました。つまり、パウロは第六章一四節で述べた「罪はあなたがたを支配することはないからである。それは、あなたがたが律法の下にはなく、恵みの下にあるからである」を例証するために、七章一—六節で、かつては律法と結婚していて、そ

の束縛の下にあったのに、今は律法との結婚関係が解消して、キリストと結婚したのだと言って、キリストのいのちと力に満たされ、神のために実を結ぶようになったのだと説明しました。クリスチャンは、もはや「律法の下」にはいないのです。これが彼の偉大なメッセージなのですが、ここで「律法は罪なのか」という疑問を抱く人々への反論ないし解説と「肉によって無力になったために、律法ができなくなっていたこと」と八章三節で言っていることの具体的な説明をしているのが、この箇所なのです。ですから、言わば括弧の中に入る箇所と言っていいでしょう。

そうであるとするならば、七章六節の「しかし今は、縛られていた律法に対して死んで、それから解き放たれたので、文字の古さによってではなく、御霊の新しさによって仕えているのである」から、八章一節の「こういうわけで、今はキリスト・イエスにある者は、絶対に断罪されることはない」につながっていくと見ることができません。確かに七章一四―二五節にしろさされているのは、生まれ変わったクリスチャンです。しかし、生まれ変わったクリスチャンの健全な姿ではありません。健全な姿は、七章六節から八章一節へと続いていくものです。それでは、不健全な姿なのでしょうか。不健全ということばは必ずしも正しくはありません。クリスチャンが地上にある間、これは現実なのです。「わたしは、心では神の律法に仕え、肉では罪の原理に仕えている」というのは、聖化が完成するまでのクリスチャンの現実です。けれども、「だれでも、ふたりの主人に仕えることはできない」の

です。そこで、聖霊により、イエス・キリストによる勝利の生活というものがあって、それがこの個所にもしるされているわけです。「わたしたちの主イエス・キリストによって神に感謝する。」そして、さらにくわしくは、八章において取り上げられます。実にキリストこそ、わたしたちの解決者であり、主であります。

注(1)次の人々は、七章一四—二五節が生まれ変わった人についてしていると言っております。

Batey, R.A., *The Letter of Paul to the Romans*, Austin, 1969, pp. 98-104.

Berkhof, L., *Systematic Theology*, Grand Rapids, 1949, p.540.

Bruce, F.F., *The Epistle of Paul to the Romans*, (Tyndale Bible Commentaries), London, 1963, pp.150-156.

Calvin, J., *In omnes Novi Testamenti Epistolas Commentarii*, Bd. 1. (カルヴァン「新約聖書注解」ローマ書(新教出版社))

Cranfield, C.E.B., *A Critical and Exegetical Commentary on The Epistle To The Romans*, Vol. 1, Edinburgh, 1975, pp.344, 355-370.

Haldane, R., *The Epistle to the Romans*, London, 1966, p.299.

Hodge, C., *Commentary on the Epistle to the Romans*, Grand Rapids, 1951, pp.357, 386.

Knox, J., *The Epistle to the Romans*, (Interpreter's Bible), New York, 1954, pp. 355 ff.

Luther, M., *Vorlesung über den Römerbrief*, 1515/1516. (ルター

「ローマ書講解」(長崎書店)

Murray, J. The Epistle To The Romans (The New International Commentary on The New Testament), Grand Rapids, 1965, pp.256-273.

Nygren, A., Commentary on Romans, Philadelphia, 1949, pp.284-296.

また、次の信条も、同じ立場をとっております。ウエストミンスター信仰告白(一六四七年)、一六章六、ベルギー信仰告白(一五六一年)、二九、ハイデルベルク教理問答書(一五六二年)一一四、一二七問、

- (2) ローマ教会への手紙五章一一二節。
- (3) 同書六章一一二節。
- (4) 同書六章六一七、一一節。
- (5) ローマ教会への手紙六章二一一二三節。
- (6)パウロのほかの手紙の中にも、生まれ変わったクリスチャンの健全な姿を描いているところはたくさんありますが、パウロの手紙以外にもたくさんあります(第一ヨハネ一・三一四、三・九、五・四―五、第一ペテロ一・四―一〇)。また主イエスが語っておられるみことばの中にも見られます(マタイ一一・二八―三〇、ヨハネ七・三七―三九、八・一二、三四―三六、一〇・九―一〇)。
- (7) ローマ教会への手紙七章七節。
- (8) マタイによる福音書六章二四節。